事例No.	3701
公表年度	R7
団体の属性	一般市
団体名	秋田県横手市

事例区分	地域活性化

タグ	・関係人口 ・人材確保・育成 ・観光

事例種類	国際交流・多文化共生

事例内容・タイトル

台湾における横手応援人口ネットワークの構築事業

出典

地方自治研究機構　先進事例調査研究（令和7年度）

台湾における横手応援人口ネットワークの構築事業

取組のあらまし

取組団体　秋田県横手市

取組内容　人口減少に対応するため、台湾・大同大學との産学官連携による教育交流や職場体験、国際ワークショップを通じた外国人関係人口拡大を推進。地域活性化と国際交流を両立する仕組みとして発展している。

予　算　等　4,147,000 円（令和７年度）

1　秋田県横手市の概要

人　　口	78,951 人	令和７年 12 月末現在
職 員 数	840 人	令和６年４月１日現在（令和７年４月１日現在、病院・消防を除く）
総 面 積	692.80 ㎢	令和７年 10 月１日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表　２　秋田県横手市の位置図

出所：図表出典

２　取組の背景・目的

(1) 取組のねらいと沿革

秋田県横手市では、人口減少と少子高齢化による地域の担い手不足や経済規模縮小が深刻化していた。こうした課題に対し、同市は早くから市外・海外に「横手応援人口」を求める取り組みを進めてきた。

国が「関係人口」という概念を提唱する以前の 2015 年には「横手市応援市民制度」を設け、継続的に横手市を応援してくれる人々（応援人口）を増やす活動を開始した。具体的には、2015 年６月に、横手市と台湾・大同大學（台北市）、そして市内 IT 企業の株式会社デジタル・ウント・メアが「国際的産学官連携協定（覚書）」を締結した。この協定のもと、2016 年度から台湾の学生受入れ事業が始まり、初年度は２人、翌年度は４人の大同大學生が横手市での職場体験に参加した。以降、両者の交流は教育・文化・観光・産業の各分野に広がりつつ発展していった。

特に、2019 年度には「関係人口創出・拡大事業」モデル事業に採択され、台湾の大学生や卒業生を外国人の関係人口として組み込み、情報発信や観光プランづくり等に取り組んだ。

2020 年５月には協定をオンラインで再締結し、以降コロナ禍で一時対面交流が途絶える中でも、Facebook ライブ配信や Zoom を活用したオンライン交流（台湾への高校生オンライン修学旅行や横手市増田地区のオンライン観光ツアー等）によって関係性を維持した。

さらに、2025 年４月には協定締結から 11 年を迎え、３度目の協定更新が行われ、新たな段階へ踏み出した。

(2) 事業の特徴

本取組は、国際的な産学官の連携を基盤に「教育交流」「職場体験」「文化観光交流」「情報発信」の各要素を組み合わせた総合的な地域活性化策である。横手市と台湾・大同大學が中心となり、現地コーディネート企業とも連携して事業を推進している。

図表 ２　３度目の協定締結

出所：株式会社デジタル・ウント・メア

３　取組内容

(1) 横手×台湾大同大學の交流

本事業は、もともと下記に示す横手市と台湾大同大學の交流を中心に取り組まれ、その活動範囲を拡大してきた。

ア 相互授業の実施

横手市と大同大學は教育分野で双方向の交流授業を行っている。横手市側は、市内の小中高生を対象に大同大學の知見を取り入れた特別授業を開催し、児童生徒の国際理解を深めている。

例えば 2025 年７月には「Cross-Border Storytelling Project（国境を越えた物語づくり）」と題し、大同大學の陳明涓教授らが横手市立朝倉小学校で特別授業を実施した。これはアイルランドの子どもたちが創作した物語に横手市の子どもたちが発想を重ねて続きの物語を作るという国際共作プロジェクトであり、オンライン交流で培った絆をリアルの場で発展させた取り組みである。

一方、台湾側でも大同大學の正規授業に横手市が協力しており、観光学やデザインの分野で横手を題材とした課題を学生に提供している。具体的には、横手市の観光コンテンツ（観光ガイドブック等）の中国語翻訳、訪日観光ツアープランの企画、さらには横手を紹介する PR 動画の制作などを学生が取り組み、実践的な学びの機会としている。

図表 ３　大学での授業の様子と作品のポストカード

出所：株式会社デジタル・ウント・メア

イ 国際デザインワークショップの開催

大同大學のデザイン学科と横手市は、地域資源をテーマに据えた国際デザインワークショップを共同開催している。2016 年４月、2017 年９月及び 2019 年４月に実施されたこのワークショップでは、教授と学生チームが横手市に一定期間滞在し、伝統的建造物や文化財、特産品などを題材にデザイン思考による作品制作や提案を行った。例えば、増田地区の蔵（伝統的土蔵群）の意匠をモチーフにしたポストカード制作や、横手の雪をテーマにしたプロダクトデザインなど、学生たちは地域の歴史・文化を学びながら創造的なアウトプットを生み出した。

成果物は地元関係者との意見交換を経て観光記念品に応用されるなど、地域資源の新たな魅力発信にもつながっている。国際ワークショップを通じ、横手市と海外の学生との間に「共に創る」関係性が築かれ、文化・言語の壁を越えた交流促進と地域課題の新視点からの検討が行われた。

本取組は、国際的な産学官の連携を基盤に「教育交流」「職場体験」「文化観光交流」「情報発信」の各要素を組み合わせた総合的な地域活性化策である。横手市と台湾・大同大學が中心となり、現地コーディネート企業とも連携して事業を推進している。

図表 ４　ワークショップの様子

出所：株式会社デジタル・ウント・メア

ウ 職場体験の受け入れ

大同大學の学生による横手市内企業での職場体験（インターンシップ）は、本事業の中心的プログラムである。2016 年に２名から始まったインターン受入は年々規模を拡大し、2025 年には応募者 10 名の中から選抜された７名が約 1 か月間来日するまでになった。

インターン終了後も交流は続き、実際に過去の参加学生が結婚後に家族や友人を連れて再び横手を訪問するといった事例も生まれ、個人的な絆へと発展している。

受入先も旅館・ホテル、飲食店、保育園、介護施設、IT 企業など多岐にわたり、学生は各職場で業務補助を行いながら日本のビジネス習慣や現場スキルを学ぶ。インターン期間中、学生たちは業務だけでなく、市内の伝統行事への参加や学校訪問による交流授業なども経験する。

図表 １　職場体験の学生の様子

出所：株式会社デジタル・ウント・メア

エ 大同大學の学校祭への参加

交流事業の発展形として、横手市は台湾で開催される大同大學の学校祭（学園祭）への出展・参加にも取り組んでいる。2018 年には横手商工会議所青年部やインターン受入企業の代表らが台湾を訪れ、同大学の学園祭にブースを出展して日本の茶道パフォーマンスや横手やきそばの試食提供を行った。現地の学生や来場者にとって日本文化や横手の食を直接体験できる貴重な機会となり、大いに賑わいを見せた。

図表 ２　大同大學学校際の様子

出所：株式会社デジタル・ウント・メア

2025 年 11 月に協定締結 10 周年を記念して学校祭へ参加。横手市内企業と連携し、企画を実施した。横手名物のご当地グルメ（横手やきそば・横手ラーメンなど）の提供に加え、30 周年を迎えた横手市増田まんが美術館とのコラボレーション展示も行い、横手のポップカルチャーと観光資源をアピールした。

(2) 交流を活かした情報発信

横手×大同大學の交流事業で築いたネットワークは、台湾向けの情報発信にも活かされている。大同大學の学生・卒業生ら有志は、中国語（繁体字）による横手市の紹介サイト「來趣 YOKOTE 雪洞之鄉」を立ち上げ、現地目線で横手の魅力を発信している。このサイトは総務省モデル事業「横手応援人口＠台湾」の一環として開設されたもので、横手市に関する観光・文化・イベント情報が現地語で継続的に更新されている。併せて Facebook ページ「來趣 YOKOTE －雪洞之鄉」や Instagram アカウントも運用され、2025 年時点で Facebook フォロワーは約 3,200 人にのぼる。

現地の若者にとって身近な SNS を通じて、横手の旬の話題やインターン生の体験談、イベント案内などがタイムリーに届けられている。さらに、交流事業から派生したユニークなコンテンツも情報発信に活用された。その一つが高校生制作の英語 PR 動画であり、横手高校の生徒たちが大同大學との交流をヒントに制作した映像作品は、市の公式 YouTube チャンネル等で公開され海外に向けたプロモーションに貢献した。

図表 ３　中国語による横手市の紹介サイト

出所：横手市 HP（https://yokote-japan.tw/）

また、大同大學の学生側も横手の魅力を紹介する２分間の日本語動画を作成し、自宅で「プチ台湾旅行」を楽しめるコンテンツとして横手市民に提供した。これら双方向の情報発信活動により、交流で関わった学生たちが「横手応援団」となって自発的に魅力を広めており、地域と海外ファンをつなぐ持続的な仕組みが形成されている。

(3) 取組の推進体制

本事業は官民協働・国際連携の体制で推進されている。横手市役所内では、観光おもてなし課が協定事業の担当課として、本事業全体の企画調整を行い、横手の魅力営業課など関係部署が連携して受入れ準備や情報発信を担当する。

具体的な交流プログラムの企画運営は、市から委託を受けた株式会社デジタル・ウント・メア（横手市所在）が担い、双方が培った国際交流ノウハウやメディア活用スキルを活かしてプロジェクトを円滑に進めている。

台湾側では協定パートナーである大同大學が中心となり、大学教員による授業提供や学生募集の協力を行うほか、現地の交流受入調整役として桔想國際有限公司が参画している。さらに、受入企業群も重要なステークホルダーである。各受入企業はインターン受け入れや学校祭参加に際して自社のリソースを提供している。

4　成果・課題

(1) 成果

本取組により、横手市は国際交流と地域活性化の双方で多くの成果を上げている。量的な指標では、協定開始から延べ 1,000 人以上の台湾の学生・教員らが横手市を訪問して長期滞在が実現した。インターン参加学生数も累計で約 100 名に達し、年々増加傾向を示している。また、台湾現地での PR イベント開催により横手市の認知度向上にも寄与している。例えば 2016 年に台北市で行った「出前かまくら」イベントでは３日間で 11 万５千人の来場者を集めるなど、台湾の一般市民へのアプローチにも成功している。

また、インターン OB・OG たちが「横手ファン」として卒業後も SNS 等で情報発信を続け、友人知人に横手訪問を呼びかける動きも生まれている。受入企業側でも、異文化交流の経験が従業員のマインドに良い刺激を与え、新たな地域課題への気づきや海外展開への意欲醸成につながったとの声がある。さらに、交流の成果物として生まれた観光 PR 動画や中国語ガイドブックなどが、市のプロモーション資産となり幅広く活用されている。

(2) 課題

課題としては、事業の継続的な資金確保があげられる。これまで総務省のモデル事業採択や市の予算措置により事業を展開してきたが、今後も安定的に交流事業を継続するためには恒常的な財源確保やコスト縮減策が求められる。

また、プログラム拡大に伴い、さらに多様な業種・分野から協力を募る必要がある。横手市は、特に英語・中国語対応が可能な人材の育成や、企業側の国際交流に対する理解促進が重要であるとしている。外国人関係人口が一過性の交流で終わらず、将来的に観光誘客や国際ビジネス、人材還流など具体的な地域貢献につながるよう、引き続き行政と民間が連携してフォローアップしていく仕組みが必要である。

関連・参考資料

横手市 HP「横手×台湾大同大學の交流」
https://www.city.yokote.lg.jp/shisei/1001176/1001460/1004819.html

株式会社デジタル・ウント・メア プレスリリース「国際的産学官連携 10 周年、協定 3 度目の締結へ」
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000002.000154299.html

総務省 HP「台湾における横手応援人口ネットワークの構築事業」
https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/model_detail/pdf/r01_42_yokoteshi_01.pdf

地方公共団体金融機構 HP「台湾における横手応援人口ネットワークの構築事業」